

福音の自負 (士師 3:12-14)

戦争や国と国、民族と民族の争い、飢饉、地震、災難、迫害が起きる終末の時代になっています。このとき、全世界に福音が宣べ伝えられ、それから終わりが来ますと言われたとおり、神様は私たちが現場灯台として世に遣わされ、勝利の道を歩むためのメッセージを与えてくださいました。士師記を通して、そのメッセージをしっかりと心に留めましょう。先週は、人は根本が変わらないといけないというメッセージを受けました。今週は、もうひとつの大きなメッセージを見ましょう。

イスラエルが神の前に悪を行ったと書かれています。そのたびに、神様はまわりの国を通して苦難をゆるされます。そうするとイスラエルは苦しく、助けを求めて叫びます。そこで神様は士師を起こされ、助けられ、平安が戻ります。しかし、その士師が死ぬと、イスラエルは「また」悪を行います。そして、苦難がゆるされ、助けを叫び、士師を起こされる…これが、「また」「また」と十何回にわたって繰り返されました。なぜイスラエルはこのように愚かなことを繰り返したのでしょうか。それは、福音がなかったか、福音を理解できなかったからです。福音がないか、理解できないなら、この世の勢力に捕らわれ、抜け出すことができず、ぐるぐる回るしかないのです。教会があり、いけにえ、みことばがあっても、福音がなく、福音を理解できないと、この世に束縛されるしかありません。これがメッセージです。これをひっくり返すなら、福音が与えられ、福音がなにかが分かることは、ほんとうに大きな恵みであり祝福であり、感謝なのかということです。クリスチャンは、イスラエルが拒否した福音を与えられ、理解できるようにしてもらった者です。士師記からのメッセージを確認して、胸に刻みましょう。

福音が与えられ、福音がなにかを分かったことは、信者の最高の誇りです。ほかに誇りがあるわけではありません。イスラエルは、これが分からず、世のスパイラルに巻き込まれました。私たちは、士師記の繰り返しに引きこまれる必要のない者です。福音が誇りなので、世のものに魅了され、未練を持ち、世から抜け出せず、世に負けること

はありません。

福音とは何でしょうか。パウロは福音を恥とは思わないと言いました(ローマ 1:16-17)。信じるすべての人に救いを与える神の力です。すべての人は罪を犯したので、滅びるしかないのですが、神様の恵みによる贖いのゆえに、値なしに義と認められます(ローマ 3:23-26)。罪人であった私たちのために神様が死んでくださり、愛をあきらかにしてくださいました(ローマ 5:8)。救いの道は他にはありません。いのちの御霊の原理によって、罪と死の原理から、永遠に解放してくださいました(ローマ 8:1-2)。子としてくださる御霊を受けて、神様を「アバ父」と呼べます(ローマ 8:15)。キリスト・イエスにある神様の愛から切り離す者はいません(ローマ 8:39)。

永遠のいのちの祝福を受けたのです。この福音が与えられ、理解できたことが信者の最高の誇りです。この福音が与えられるきっかけやプロセスはいろいろあります。病気、家庭の問題、いじめ、つらい経験、精神疾患などを通して、恵みのうちに福音を悟るようになったでしょう。これは、なににも変えられない福音にあずかるためにあったことで、傷や暗い記憶として残し、支配される必要はありません。かえって、それによって福音を知ったので、感謝が変わるのです。悟れるのも、神様の恵みによって悟れるのです。ただキリストを知り、告白できることが感謝です。パウロは福音が分かったとき、いままでのすべてのことがちりあきたとなりました。福音そのものが誇りだと言いました。クリスチャンの最後の戦いは、世の勢力との戦いです。悪魔が天使のように装って入ってきて、世のものによって振り回そうとします。福音が誇りになっていないと、世のものが良く見えるのです。士師記を通して、福音が誇りになるようにしましょう。

福音が分かることが感謝で誇りになり、福音の価値がわかるなら、その**福音を自分が所有していることが最高の自負**となります。誇りと自負を持つことが、信者の特権であり、現場灯台の力となります。パウロは罪囚であったのに、王に向かって、自分のようになってほしいと言いました。王の

地位はちりあきたに過ぎず、それとは比べ物にならない、キリスト、福音を所有していることが自負となっていたので、世のものに惑わされなかったのです。ルカ 18 章に、金持ちの青年の話が出て来ますが、それは、福音の価値は財産と比べ物にならないということを言われているのです。イエス様は、自分の十字架を負ってついて来なさいと言われました(ルカ 14:26-27)。福音の価値は、いのちの価値とも比べ物にならないのです。この価値が分かるなら、自負となります。世界中でこの御名の他には救われるべき名はありません。オンリーの価値です。滅びの呪いの運命から出ること、罪と地獄の勢力から出ること、サタンの手から自由になること、神様から離れた人間が、神様と出会い、いのちを得ることができ、罪が赦されるのは、ただ福音だけです。この福音ゆえに地獄の運命から、天の御国を所有する者になりました。悪魔が父であった身分から神の子どもになりました。何を食べるか飲むかという世のむなしい人生ではなく、世の光、王である祭司、聖なる国民として生きることができるようになりました。福音ゆえに、世の流れの中で、偶像崇拜をして、サタンに仕えてきた人生から、イエスがなされたことと同じことができる人生に変えられました。福音の他に

は、それはできません。パウロは刑務所の中でも、土の器の中にある宝を誇りました。滅びることなく、他に未練も、ほしいことも、心からひかれることもありません。人間的に誇れることがあっても、それは自負にはなりません。パウロもダビデも、神様のしもべであることが自負でした。世的、人間的なことで誇れることがないので、手に入れようとする必要はありません。世に生きる理由は別にあります。絶対価値、オンリーの価値を自分のものにして自負しているなら、自分を守ることになりません。

福音があるので、世を見る目が違います。恐れ、うらやむこと、問題、引っかかること、未練、魅力に感じることもなくなり、野望、世の成功、より良い世界を作るためにがんばることなども、永遠に続くのではないとわかります。キリストの他にはありません。福音が必要なこの世にキリストを伝えて、神の国を伝えることが、生きる理由だとわかります。世のものではなく(ヨハネ 17:18)、世に派遣されている者です。この価値観が通じる者が集まるときに、爆発的なパワーが現れます。福音が誇り、自負となるように、お祈りします。

(<http://jremnant.com> に音声と動画が出ています)

士師記 3:12-14 福音の自負

なるほど/福音がなければ、教会の組織があり、聖書があっても、世の中に縛られて抜けられないし、世に勝つことができない。信者は、福音を知りその価値がわかった者なので、福音が誇りであり自負になり、士師記を繰り返す必要がなく、世を生かす現場灯台として生きる。ならば/世を見る目を整理して、世を恐れずうらやまず、また成功のための場と思わず、この世を福音が必要な伝道場として胸に刻んで祈ろう。

インマヌエル教会聖日メッセージ祈り文 (2019年8月4日)

1 部礼拝： 教会のために (イザ 60:1-3)

神様が私にくださった三つの祝福を持って教会を建てて、次世代にその祝福を伝えるようにしてください感謝します。ただイエス・キリストによって救いを与える福音の奥義を味わいながら、レムナントに福音を刻印しますように。唯一性の祝福である神の国の背景を持って聖霊に導かれながら、世の中の枠を変えますように。聖霊のみわざによって絶対不可能を絶対可能に変える再創造の答えを持って、教会のために福音を伝えますように。237 国を生かす神殿建築によって人生作品を残しますように。イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

2 部礼拝： 神様の新しい始まり (I 列 19:1-18)

伝道者の CVDIP を成し遂げるバヌアツ集会とサミット集い、RU のために集中祈りをして、崩れて行く教会と世の中を生かす新しい始まりをすることができて感謝します。落胆せずに契約の中で神様が願っておられる私、私に向けた神様の絶対計画を見つけてますように。すべての問題と事件の中に神様の絶対計画があることを信じて、霊的な力を得ますように。私は弱いけれども、神様が備えた使命を見つけて、次世代を生かして、237 国を生かしますように。イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。